

台湾における高齢者意識の構造

—その持続と変容—

范 蓓怡

1 はじめに

東アジア社会の台湾では、儒教倫理の影響でこれまで親孝行が説かれ、子供が老いた親と同居し、親の扶養が慣習化してきた。また、西洋国家と東洋国家の間の一番大きな相違点として、儒教文化の「敬老精神」が取り上げられてきて、アメリカの社会学者のパルマーは、「アメリカやヨーロッパの国々と違い、アジアの国々では老人を敬う精神がある為、老人差別（エイジズム）が少ない」と述べていた（奥山・秋葉・片多，1995：106）。

さらに、台湾と日本の大学生を対象にした調査（范，2011：181）でも、台湾の大学生の97.0%は、「敬老精神を伝承する必要がある」と答えており、日本の大学生においても、82.1%が伝承する必要があるとしており、東洋社会における敬老意識は、現在でも存続しているように思われる。

ところが、『自由時報』2011年12月20日の記事によると、子どもがアメリカへ移民し、生活費のない78歳の高齢者が、スーパーで食べ物を盗む事件があったという。新聞やテレビなどでは、しばしば老人虐待や老人の自殺、親捨てなど、老人をめぐる不幸なニュースが報道されている（陳，2006）。仮に、台湾の人々が伝統的な東洋文化精神を維持しつづけていけば、人々は年を取っても、家庭内地位と社会での地位をある程度保ち、「含飴弄孫」という悠々自適の生活を送ることができ、前述したような問題は起こらないはずである。

しかし、現実的には、台湾においても、急速な近代化により家族構造が変化し、核家族化や小家族化が進展している。その結果、成人子女による老親扶養や敬老精神などが希薄化し、次第に衰退しつつある傾向が見られる。果たして現在、どの程度の敬老精神や老親扶養意識といったものが存在しているのだろうか、そのような意識はどのような規定要因によって、持続あるいは変容していくのであろうか。

以上のような問題意識のもとで、本稿では、かつて儒教的な価値文化と高齢者を尊敬する意識を持っていた、東アジアの台湾における若者たちが、現在の高齢者をどのように捉えているかの実態分析に基づき、高齢者に対する価値意識の構造を詳細に分析し、どのような意識が持続し、どのような意識から変容していくのかを考察していきたい。

また、若者たちの意識のありようを把握しておくことは、将来の高齢社会のあり方を見据えるためにも不可欠で、台湾社会はどのような高齢社会へ進んでいくかということをも想定することができる。更に、その意識構造の分析結果からは、東アジアの伝統的な文化精神がどのように維持され、どのように変化していくかを示唆することもできると考える。

2 先行研究の考察

近代化とともに家族形態が大きく変化してきたことは事実で、人間の行動様式はその社会文化背景の変化、価値意識などによって左右される。若者の高齢者に対する意識に影響を及ぼす要因として、これまで家族構造と扶養意識、家族意識、老人意識との関連が研究されてきており、それらの先行研究について考察しておきたい。

2-1 家族構造の変化

産業化と近代化に伴い親子同居の比率が減少し、一人暮らし或いは夫婦のみの高齢世帯の比率が増加傾向にある。台湾も例外ではなく、成人子女が高齢の親と同居する比率は減ってきているだけでなく、成人子女が出稼ぎに行き、老いた親が子女の子供の面倒を見る、いわゆる孫と祖父母のみからなる「隔代家族」という家族構造も出てきている。

親子の同居・別居問題に関しては、「スプーンの冷めない距離」での別居の形態が理想的だと指摘されている（中村，2006：108）。また、老親扶養の場を養老施設や有料老人ホームにするケースも出てきている。このように台湾社会における伝統的な家族構造が崩れてきたばかりでなく、親子の同居・別居に対する考え方も変化してきている。

一方、伝統的な親子関係の中では、子世代と親世代の付き合いは、相互に利益があると考えられてきた。ホーマンズの「社会的交換理論」によると、この相互に利益が得られる状態には、「投資—回報」交換（すなわち親への恩返し）と「同時」交換（孫の世話に対して、子供からの仕送り或いは精神的な支え）が含まれている（橋本訳，1978）。伝統的な東洋社会における高齢者の所得保障としては、「世代間の移転（inter-generational transfer）」を指していた。すなわち、親は、老後はわが子に扶養してもらうために子供を大切に育てる（養児防老）のである。しかし、現在の親子関係においては、「親扶養」という「投資—回報」交換は少なくなってきたが、「孫の面倒—精神的な支え」という「同時」交換はまだ残っている。親子関係の中で、親世代にとっては情緒的な結びつきやケア機能などが、子世代にとっては家事や育児の分業といった利益が、相互に得られている。

また、子世代の経済能力が低く、家賃を節約するために親の持ち家で同居する者も少なくない。しかも、親に経済的に依存している成人未婚子女、いわゆるパラサイトシングルも多くなっていることから、親子関係は、「交換理論」から、田淵（1997）のいう「戦略的親子関係」へ進んでいき、親子関係は一元化から多元化へ向かっていると見えよう。

2-2 扶養意識の変容

東洋社会においては、儒教的な啓蒙により老親扶養意識や敬老思想が広く浸透していた。養老・敬老や老人を大切にする思想は、その思想体系の核心となる「孝」の思想に密接に結びついている（野原，2001：43）。孝とは「子の親への従順」、つまり尊親を表す。孝の実行、尊親思想のさらなる浸透を促すために、年長者を尊び高齢者を大切にする敬老思想が提唱された。敬老は尊親に繋がり、尊親は敬老に繋がるとして、儒教では敬老思想は事

実上「孝」の思想とほぼ同等視されている（野原，2001：45）。

また、戦前の家制度は、孝の思想や敬老思想に支えられ、老親扶養を支えるシステムとしての機能を果たしていた。長男は家督や財産（遺産）、家業などを継承し、同時に親を同居扶養する義務を負った。子供は親に育ててもらった恩を、孝で償うという価値意識があった。すなわち、家というシステムの中で高齢者の生活や地位は安定していた（鳥羽，2005：90）。親扶養は親孝行の表現の一つで、成人子女が親扶養をすることは当然であったために、親は老後を心配しなくてもよかった。東洋社会では高齢となって引退しても老後生活には問題はなかったのである。

更に、森岡・望月（1997：136-147）によれば、親の扶養は「経済的援助に加え、保健欲求の充足に関する身辺介護、情緒的反応欲求の充足に関する情緒的援助が重要な側面をなす」。親扶養のパターンは同居型親扶養、近居型親扶養、遠居型親扶養があり、同居型が最も機能的で、近居型はそれに次ぎ、遠居型は困難が最も多いという。

今日、世帯構造は変化し、親子の同居率が低下しており、しかも、その「同居率の低下は高齢者扶養の低下とかなりの精度をもって結びついている」（正岡，1993）のである。世代間扶養の不十分さもさることながら、子供による扶養からはみ出す高齢者は著しく増加する。また、家を中心とした家族規範から抜け出し、個人の考えを重視するようになり、親扶養意識も少しずつ変化してきている。

一方、范（2008：190）の研究によれば、台湾の高齢者は、精神的にも経済的にも、依然として子供に依存する気持ちを強く持っていた。しかし、直井（1993：38-71）の指摘したように、同居慣行といった家族規範は不明確になりつつある。近代化とともに、親子が密接に結びついていた扶養関係は大きく変化していることは明らかである。

2-3 家族意識

中華文化圏の人々は集団主義を重んじている。それは日本人の集団主義とは異なり、「家族或いは親族」という群れを大切にすることである（陳，1999：205）。多くの研究では、「他の民族に比べ、中華文化圏の人たちの顕著な特徴は『家族集団主義』を重んじていることである」と指摘されている（Freeman, M, 1979）。家庭生活は伝統的な中華文化社会では中心的な社会生活で、黄（1995：276-338）は、「家族集団主義の影響で、台湾人は職場においても、家族（或いは親族）と他人を区別し、何事に対しても、家庭生活を優先し努力する傾向にある」と述べている。家族は何よりも大切な集団であるため、台湾人は家族のためならどのような努力もする。つまり台湾人は、「家族第一主義者」である。

2-4 若者の老人観

若者が高齢者に対して、どのようなイメージを持っているかは、高齢社会がどのような方向へと進んでいくのかということと関係していると思われる。

奥山（1990：38）は、タテマエとしての敬老思想が広がっているにも関わらず、一般の人々の間にホンネとしての高齢者軽蔑意識や無関心が浸透する原因として、めまぐるしい技術革新や若者文化中心の価値体系、消費生活、個人生活重視の傾向、死へ結びつく高齢者の病気や死に対する嫌悪感などをあげている。また、若者の高齢者観の調査結果は、総じて否定的なものが多く（鳥羽，2005：91）、多くの若者は高齢者に対しては差別意識をもつ傾向がある。

また、若者の高齢者に対する認識、イメージに影響を与える要因として、核家族化による高齢者との交流の減少、扶養意識の変化、年齢による雇用制限といった社会的背景が取りあげられる（島村，2004：4-12）。保坂ら（1986：114）も、イメージ、老人観を規定する要因として、最も大きいのが「老人と話す機会」であり、次に「老人や老人問題に対する関心」をあげている。更に、高齢者との交流経験の内容が問題になることも指摘されている。作田（2005：25）は、若者の高齢者像には祖父母との生活経験や現状での高齢者との付き合いが影響していることを指摘した。また、頼・荘（2005：52）によると、台湾の大学生の老人観に関しては、高齢者との付き合いが多ければ多いほど、高齢者への尊敬意識が高い。更に、辻（2005：55-56）の国際調査では、敬老精神が「ある」と答えた者は、日本が28.6%、台湾が51.9%、中国が83.1%である。近代化の進展に伴い、敬老精神が希薄化しつつあることも明らかである。

3 分析枠組みと調査の概要

3-1 分析枠組み

以上の先行研究を踏まえて、本稿では大学生の高齢者意識の持続と変容を分析するための枠組みを以下のように提示したい。

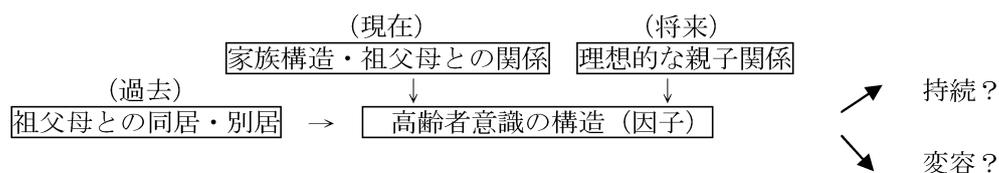


図1 分析の枠組み

図1に示したように、若者の高齢者意識の構造は、過去の生活経験（祖父母との同居・別居経験）と現在の生活状態（家族構造・祖父母との関係）、及び将来の望ましい生活形態（理想的な親子関係）によって、影響されていると考え、本論では、その意識構造の分析から、どのような高齢者意識が持続され、また、どのような高齢者意識から変容していくかを探究していきたい。

3-2 調査概要

若者の高齢者意識に関する調査は、2010年5月から6月にかけて、台湾の台南にある私

立大学 A 大学と N 大学の台湾人大学生を対象に実施した。調査方法は、学校による集合自記式調査法で、330 票を配布し、303 票を回収し、回収率は 91.8%であった。調査項目は「親扶養や敬老などに関する意識」と「フェースシート」から構成されている。

調査対象者の属性は、以下の表 1 の通りである。

表 1 台湾調査対象者の概要 実数 (%)

性別	男性 83 (27.4)	女性 217 (71.6)	不明 3 (1.0)
出身地	北部都会 53 (17.5)	中部都会 24 (7.9)	南部都会 55 (18.2)
	北部都会の周辺 17 (5.6)	中部都会の周辺 11 (3.6)	南部都会の周辺 48 (15.8)
	北部農村地域 8 (2.6)	中部農村地域 21 (6.9)	南部農村地域 52 (17.2)
	東部地区 5 (1.7)	金門・澎湖 4 (1.3)	不明 5 (1.7)
兄弟人数	1 人 15 (5.0)	2 人 105 (34.7)	3 人 129 (42.6)
	不明 2 (0.7)		4 人以上 52 (17.2)
年齢	18-20 歳 181 (59.7)	21-25 歳 112 (37.0)	26-30 歳 4 (1.3)
	31 歳以上 3 (1.0)	不明 3 (1.0)	
敬老意識	支持する者 294 (97.0)		支持しない者 9 (3.0)
祖父母との同居経験	ある者 209 (69.0)		ない者 94 (31.0)
家族形態	大家族 23 (7.6)	三世代家族 67 (22.1)	核家族 183 (60.4)
	隔代家族 4 (1.3)	父・母子家庭 20 (6.6)	その他 3 (1.0) 不明 3 (1.0)

注) 兄弟人数は調査対象者を含む数である。

敬老意識を持つ者は 97.0%と大部分を占め、祖父母との同居経験を持つ者は 69.0%いる。現在の家族形態は、核家族が 60.4%と最も多いが、三世代家族も 22.1%、大家族が 7.6%で、「隔代家族」も 1.3%あり、約 3 割は、祖父母と同居していることがわかる。

4 台湾人大学生の高齢者に対する価値意識

4-1 高齢者に対する価値意識因子

高齢者に対する価値意識の相互関連を検討するために、親扶養、親介護、親孝行意識、敬老・棄老意識などからなる 40 項目から (范蓓怡, 2008)、実数が少なかった項目の因子を除外して、27 項目を抽出した。その価値意識 27 項目について因子分析 (主成分分析) を行った結果は、表 2 に示したとおりである。

本調査においては、6 つの因子が抽出された (寄与累積率=53.863%)。

第一因子は「高齢者と話し合うのは意義がある」、「若者にとって高齢者の生活経験と知恵は良い勉強になる」などの項目が含まれており、「肯定的高齢者観」因子と命名した。第二因子は「高齢者は若者と付き合いにくい」や「ほとんどの高齢者は新しい物に対して、学習意欲が低い」などの項目からなり、「ステレオタイプ高齢者観」因子と命名した。第三因子は「敬老精神はもう現代社会に合わない」や「高齢者は家庭にも社会にも大きな負担をかける存在である」などの項目であり、「高齢者存在の社会観」因子と命名した。第四因子は「親への仕送り、お小遣いをあげることは親孝行の一つである」と「子供を大切に育てるのは老後の面倒を見てもらうためである」と「高齢期に入ってから、孫と一緒に遊ぶような悠々自適の生活が望ましい」という項目からなり、「伝統的扶養観」因子と命名した。第五因子は「高齢者になっても自立したほうがいい」と「親の尊厳を維持するために、

経済的に自立したほうがいい」と「高齢者にとって再就労するのは自分がまだ社会に貢献できるという最高の証明である」であり、「高齢者自立観」因子と命名した。第六因子は「年寄いた親と同居するのは当たり前である」や「親を老人ホームに入れるのは親不孝である」などの項目からなり、「伝統的親子観」因子と命名した。

表2 台湾大学生の価値意識の因子分析

	成 分					
	1	2	3	4	5	6
19高齢者と話し合うのは意義がある	.700	-.199	-.055	.120	-.013	-.004
29高齢者は家庭の中で一番の精神的な支えになっている	.695	-.040	-.200	.050	.073	.093
40若者にとって高齢者の生活経験と知恵は良い勉強になる	.679	-.164	-.358	-.067	.059	.087
28ほとんどの高齢者の話は良い参考になる	.658	-.099	-.070	.131	.092	-.004
18お年よりは尊い存在である	.654	-.204	-.028	.075	.076	.192
30三世同居することは東アジアの伝統的な文化を維持する良い方法の一つである	.611	-.086	.083	.140	-.099	.235
38高齢者は伝統的な文化を伝承することには欠かせないものである	.504	-.068	-.366	-.232	.098	.189
22高齢者は家庭に大きく貢献している	.492	.115	-.074	.327	.041	.056
13ほとんどの高齢者は新しい物に対して、学習意欲が低い	-.111	.749	-.047	.001	.060	.055
12高齢者は若者と付き合いにくい	-.237	.721	.119	.137	.082	.015
11ほとんどの高齢者は頑固である	-.027	.711	.124	.125	.106	-.104
27高齢者の多くは自分の知識や経験を若者に話したがる	-.031	.653	.189	-.259	-.039	.040
37お年寄りには昔の事ばかり思い出したり、同じ話を繰り返したりしているので、付き合いにくい	-.313	.603	.134	.105	.072	-.038
32敬老精神はもう現代社会に合わない	-.234	.096	.716	-.127	.167	.014
20高齢者は家庭にも社会にも大きな負担をかける存在である	-.114	.233	.613	.208	-.038	-.285
31敬老精神を伝承すべきである	.523	.006	-.532	.092	.049	.115
39高齢者の経験は現代社会ではもう生かせない	-.304	.344	.511	.087	.065	.145
21多くの高齢者は家庭生活を中心として過ごしている	.167	.439	.442	-.139	.008	-.133
16親への仕送り、お小遣いをあげることは親孝行の一つである	.192	.056	.161	.666	.344	-.047
6子供を大切に育てるのは老後の面倒を見てもらうためである	.120	.034	.183	.655	-.006	.231
7高齢期に入ってから、孫と一緒に遊ぶような悠々自適の生活が望ましい	.162	-.014	-.044	.636	-.177	.314
9高齢者になっても自立したほうがいい	-.069	.011	-.034	-.144	.739	.045
10親の尊厳を維持するために、経済的に自立したほうがいい	.086	.084	.034	.254	.731	.013
14高齢者にとって再就労するのは自分がまだ社会に貢献できるという最高の証明である	.261	.213	.201	-.010	.529	.149
4親を老人ホームに入れるのは親不孝である	.166	.141	-.019	.098	.159	.696
5病気の親の面倒を見るのは当たり前のことである	.059	-.119	-.233	.212	.119	.609
3老いた親と同居するのは当たり前のことである	.400	-.088	.013	.139	-.143	.574
寄与累積率 (%)	15.349	26.442	34.574	41.495	47.711	53.863

因子抽出法: 主成分分析 回転法: Kaiser の正規化を伴わないリマックス法 8 回の反復で回転が収束した Kaiser-Meyer-Olkin の標本妥当性の測度: .832

4-2 個人属性と価値意識

まず最初に、各価値意識の因子間と個人的属性とにどのような関連があるかについて、分散分析を行った。結果は表3のとおりである。

全体的には、属性と価値意識の因子との関連性はそれほど強くはみられない。強いて言えば、出身地による高齢者意識に相違が見られる。すなわち、農村地域出身者は都会出身者より「伝統的扶養観」と「伝統的親子観」をより強く持っており、中南部地方出身者も北部地方出身者より、「伝統的扶養観」と「伝統的親子観」を強く持っている。

また、女性より男性のほうが「ステレオタイプ高齢者観」を持っていることもわかる。ほかの個人的属性は価値意識にあまり影響を与えてはいないようである。

表3 価値意識に関連する要因：多元配置分散分析の結果 (有意確率)

	性別	出身地	家族	兄弟人数	年齢	経済状態
肯定的高齢者観						
ステレオタイプ 高齢者観	**				*	
高齢者存在の 社会観						
伝統的扶養観		**			*	
高齢者自立観						
伝統的親子観		*				

(**) P<.01 (*) P<.05 注)出身地：農村地域>都会地域/中南部地方>北部地方 性別：男>女

4-3 祖父母との同居経験（過去の生活経験）からみた価値意識

分析枠組みに基づいて、過去祖父母と同居したことがあるかどうかという生活経験、祖父母との関係の良し悪し・家族形態（現在の生活状態）及び理想的な親子関係（将来の望ましい生活形態）が、高齢者意識の構造に影響を与えているかどうかをみていきたい。

そこで、まず祖父母との同居・別居経験における価値意識因子の相違を検討するために、因子ごとに T 検定を行った。表4のように、同居・別居経験にみた各価値意識因子の平均値を求めた。価値意識に関する調査項目は、「そう思う」、「ややそう思う」、「どちらともいえない」、「あまりそう思わない」、「全くそう思わない」という順に小さな数値から大きな数値で表示し、5段階に分けた。これは平均値が高ければ高いほど、否定的な意味が強く、平均値が低ければ低いほど、肯定的な意味が強いことを表している。また、「伝統的親子観」因子だけにおいて、祖父母との同居・別居という過去の生活経験に有意性が見られたが、ほかには大きな差異がないことが判明した。更に詳しく言えば、祖父母との同居経験がある者は「老いた親と同居するのは当たり前のことである」や「親を老人ホームに入れるのは親不孝である」などの「伝統的親子観」を強く持っている。

表4 祖父母との同居経験からみた価値意識

	同居経験	N	平均値	標準偏差	平均値の標準誤差	T 検定
肯定的 高齢者観	ある	188	-.0753760	1.02625758	.07484753	-1.889
	ない	90	.1574520	.92864165	.09788743	
ステレオタイ プ高齢者観	ある	188	-.0190280	.96068004	.07006479	-.458
	ない	90	.0397474	1.08206159	.11405931	
高齢者存在の 社会観	ある	188	.0610960	1.01001731	.07366308	1.496
	ない	90	-.1276228	.97189222	.10244644	
伝統的扶養観	ある	188	.0641900	1.01577720	.07408317	1.583
	ない	90	-.1340857	.95787714	.10096912	
高齢者自立観	ある	188	-.0023269	1.00320217	.07316604	-.056
	ない	90	.0048607	.99886073	.10528917	
伝統的親子観	ある	188	-.1167504	.97747171	.07128945	-2.849 (**)
	ない	90	.2438787	1.00791918	.10624401	

(**) P<.01

4-4 祖父母との関係と家族形態（現在の生活状態）からみた価値意識

また、祖父母との関係における価値意識の相違について検討するために、因子ごとに分散分析を行った。結果は表5のように、「高齢者自立観」因子と「伝統的親子観」因子以外の「肯定的高齢者観」因子、「ステレオタイプ高齢者観」因子、「高齢者存在の社会観」因子、「伝統的扶養観」因子には、いずれも有意性が見られた。

更に詳しく見れば、祖父母との関係が良いほど、「肯定的高齢者観」因子と「伝統的扶養観」因子を強く持っているのに対して、祖父母との関係が良くない者は「ステレオタイプ高齢者観」因子と「高齢者存在の社会観」因子を持つ傾向がある。つまり、祖父母との関係が良ければ良いほど、「高齢者は家庭の中で一番の精神的な支えになっている」や「高齢者と話し合うのは意義がある」などの「肯定的高齢者観」因子と「親への仕送り、お小遣いをあげることは親孝行の一つである」や「子供を大切に育てるのは老後の面倒を見てもらうためである」などの「伝統的扶養観」因子を強く持っている。それに対して、祖父母との関係が悪ければ悪いほど、「ほとんどの高齢者は新しい物に対して、学習意欲が低い」や「高齢者は若者と付き合いにくい」などの「ステレオタイプ高齢者観」因子と「敬老精神はもう現代社会に合わない」や「高齢者は家庭にも社会にも大きな負担をかける存在である」などの「高齢者存在の社会観」因子を強く持っていることがわかる。

表5 祖父母との関係からみた価値意識

		平方和	自由度	平均平方	F 値	多重比較
肯定的高齢者観	グループ間	43.061	5	10.468	11.977 (***)	A>F>B>C>D>E
	グループ内	230.842	267	.874		
	合計	273.903	272			
ステレオタイプ高齢者観	グループ間	12.475	5	3.091	3.679 (**)	E>D>C>B>F>A
	グループ内	260.115	267	.840		
	合計	272.590	272			
高齢者存在の社会観	グループ間	13.273	5	2.967	3.036 (*)	E>C>D>B>F>A
	グループ内	259.396	267	.978		
	合計	272.669	272			
伝統的扶養観	グループ間	12.360	5	2.922	3.012 (*)	A>C>B>F>D>E
	グループ内	262.438	267	.970		
	合計	274.798	272			
高齢者自立観	グループ間	4.876	5	1.218	1.230	D>E>A>F>C>B
	グループ内	270.711	267	.991		
	合計	275.587	272			
伝統的親子観	グループ間	1.367	5	.337	.326	E>D>A>F>B>C
	グループ内	273.658	267	1.035		
	合計	275.025	272			

(***) $P < .001$ (*) $P < .05$

注) A: 関係が非常に良い B: 関係がまあまあ良い C: 関係が普通 D: 関係があまり良くない
E: 関係が非常に良くない F: 祖父母は既に他界している

一方、家族形態における価値意識の相違を検討するために、因子ごとに分散分析を行った。結果を表6に示した。

表6 家族形態からみた価値意識

		平方和	自由度	平均平方	F 値	多重比較
肯定的高齢者観	グループ間	2.362	5	8.612	9.961 (***)	D>B>A>E>C>F
	グループ内	271.777	269	.865		
	合計	274.139	274			
ステレオタイプ高齢者観	グループ間	1.918	5	2.495	2.561 (*)	D>F>A>B>C>E
	グループ内	272.858	269	.974		
	合計	274.776	274			
高齢者存在の社会観	グループ間	3.308	5	2.655	2.732 (*)	C>E>B>A>F>D
	グループ内	272.747	269	.972		
	合計	276.055	274			
伝統的扶養観	グループ間	1.273	5	2.472	2.515 (*)	D>A>B>C>E>F
	グループ内	273.855	269	.983		
	合計	275.128	274			
高齢者自立観	グループ間	6.872	5	.975	.962	B>A>C>E>D>F
	グループ内	268.742	269	1.014		
	合計	275.614	274			
伝統的親子観	グループ間	4.947	5	.273	.267	F>D>B>A>C>E
	グループ内	270.541	269	1.025		
	合計	275.487	274			

(***) P<.001 (*) P<.05

注) A:大家族 B:三世代家族 C:核家族 D:隔代家族 E:父・母子家族 F:その他

「高齢者自立観」因子と「伝統的親子観」因子を除き、ほかのいずれの因子にも大いに差があるということは明白である。詳細に見ると、「肯定的高齢者観」因子と「ステレオタイプ高齢者観」因子と「伝統的扶養観」因子については、すべて隔代家族に属している者が最も強く持っており、次いで、大家族か三世代家族に属している者に強い。また、父・母子家族と核家族に属している者はそれほど強く持っていない。ここから、大家族或いは三世代世帯という家族形態は伝統的な価値意識を伝承するのに確かに有効であるといえよう。また少数ではあるが、隔代家族に属している者は、小さな頃からずっと祖父母と一緒に暮らしてきているので、祖父母との繋がりが一層強い傾向が見られる。

4-5 理想的な親子関係と老後生活（将来の望ましい生活形態）からみた価値意識

最後に、理想的な親子関係における価値意識の相違を検討するために、因子ごとに分散分析を行った。結果は表7に示したように「肯定的高齢者観」因子と「伝統的親子観」因子には大いに差がある。詳細に見ると、「肯定的高齢者観」因子と「伝統的親子観」因子を一番強く持っているのは、将来老親と一緒に同居したい「同居型」であり、次いで「近居型」で、最後は「遠居型」である。この結果は「親子同居＝親扶養」という先行研究の示唆と一致している。

更に、理想的な老後生活からみた価値意識の相違の結果は、「伝統的扶養観」因子と「高齢者自立観」因子と「伝統的親子観」因子において顕著な差が見られる。つまり、「含飴弄孫＝理想的な老後生活」と思っている者は「伝統的扶養観」因子と「伝統的親子観」因子を最も強く持っているのに対して、「老親に望ましい生活をさせたい」と思っている者は「高齢者自立観」因子を最も強く持っているといえる。

表7 理想的な親子関係・老後生活からみた価値意識

		自由 度	平方和	平均 平方	F 値	多重 比較	平方和	平均 平方	F 値	多重 比較
肯定的 高齢者 観	グループ間	2	14.327	7.163	7.500 (**)	A>B>C	1.966	.983	.983	A>B>C
	グループ内	275	262.673	.955			275.034	1.000		
	合計	277	277.000				277.000			
ステレ オタイ プ高 齢者 観	グループ間	2	.084	.042	.042	B>A>C	2.350	1.175	1.176	B>C>A
	グループ内	275	276.916	1.007			274.650	.999		
	合計	277	277.000				277.000			
高齢者 存在の 社会観	グループ間	2	.573	.287	.285	C>B>A	.164	.082	.081	A>C>B
	グループ内	275	276.427	1.005			276.836	1.007		
	合計	277	277.000				277.000			
伝統的 扶養観	グループ間	2	5.526	2.763	2.799	A>B>C	21.530	10.765	11.588 (***)	A>B>C
	グループ内	275	271.474	.987			255.470	.929		
	合計	277	277.000				277.000			
高齢者 自立観	グループ間	2	.732	.366	.364	C>A>B	7.854	3.927	4.012 (*)	C>B>A
	グループ内	275	276.268	1.005			269.146	.979		
	合計	277	277.000				277.000			
伝統的 親子観	グループ間	2	17.706	8.853	9.389 (***)	A>B>C	6.929	3.465	3.528 (*)	A>B>C
	グループ内	275	259.294	.943			270.071	.982		
	合計	277	277.000				277.000			

(***) P<.001 (**) P<.01 (*) P<.05

左注)A:三世代世帯 B:親子が近所に住み、面倒を見る C:親子が別居しているが時々見に行く

右注)A:含飴弄孫=理想的な老後生活 B:孫の面倒を見る=お金をあげる C:老親に望ましい生活をさせたい

また、詳細な表は省略するが、理想的な親子関係について、全体的には「近所に住み、面倒を見る」を選んだ者（近居型）が62.4%で、最も多い。次は「別居しているが時々見に行く」を選んだ者（遠居型）が23.8%で、「三世代世帯」（同居型）を選んだ者は13.9%しかいない。このことから、親子別居は次第に一般化してきているといえよう。

一方、理想的な老後生活に関しては、「結婚したら老親に自分の子供の面倒を見させますか」という質問を行った。その結果、「老いた親に子供の面倒を見てほしく、面倒をみてくれた老いた親に、お金をあげる」という回答を選んだ者は、約7割を占めており、「老親に望ましい生活をさせたい」と思っている者は約2割であり、最も少なかったのは「含飴弄孫=理想的な老後生活」と思っている者で、わずか1割である。この結果からは、台湾における現在までの親子関係は、ホームマンズが提出した相互交換理論によって説明できそうである。すなわち、「孫の面倒—精神的（経済的）な支え」という「同時」交換は、依然として残っていることが明らかである。

5 結び

以上の分析から、得られた知見を要約し、高齢者意識の持続可能な部分と変化していく部分を述べていきたい（表8参照）。

- ①ほとんど大学生は敬老精神を伝承する必要があると思っており、伝統的な敬老精神を伝承する可能性は高く、敬老精神は持続されそうである。一方、祖父母と同居したことが

ある者が7割近くいるのに対し、現在の家族形態は核家族が6割で、祖父母と暮らした経験を持つ者は多いが、同居（時間）はそれほど長くない。近代化とともに、家族構造は確かに変化しつつある。

②価値意識と関連する過去の生活経験としての「祖父母との同居・別居経験」は、それほど顕著な関連はない。それに対して、現在の生活状態の「祖父母との関係」と「家族形態」、及び将来の「理想的な親子関係」のいずれもとは、価値意識との相関性が高い。

祖父母との良好な関係や大家族または三世代世帯は、伝統的な東洋文化精神（敬老精神や老親扶養など）の伝承に有効である。更に、祖父母との付き合いが長いほど、「肯定的高齢者観」因子と「伝統的扶養観」因子の伝統的な価値意識を強く持っている。しかし、家族形態が変化しつつある現実からみると、東洋社会における肯定的な価値意識（「肯定的高齢者観」と「伝統的扶養観」）が弱くなる一方、否定的な価値意識（「ステレオタイプ高齢者観」と「高齢者存在の社会観」）は、依然として存続していくと思われる。

③理想的な親子関係（将来の望ましい生活形態）については、「親子は近くに別居し、面倒を見る」とする者は6割以上で、親子同居という規範的な価値意識は希薄化しつつある。また、祖父母との同居・別居という生活経験と「伝統的親子観」に有意性が見られたことから、祖父母と同居する三世代世帯の遂行は「伝統的親子観」を伝承することに役立つといえるが、家族形態の変化に伴い、「伝統的親子観」も弱くなっていくと思われる。

④理想的な老後生活については、約7割が「子供の面倒を見る＝老親にお金をあげる」と考えており、「同時交換」という親子関係は存続していくといえよう。しかし、「老親に望ましい生活をさせたい」と思う者は「含飴弄孫＝理想的な老後生活」と思う者より多く、将来、台湾社会は欧米のように、親子が別々の個体として存在し、個人の自立を強調している社会になることも推測される。

表8 高齢者意識の構造－持続と変容－

持続していく意識	変容していく意識
敬老精神（伝承を支持する者が多い） ステレオタイプ高齢者観 高齢者存在の社会観 同時交換という親子関係（自分の子供の面倒を見る＝老親にお金をあげる）	家族構造（三世代世帯→核家族） 理想的な親子関係（同居型から近居型と遠居型へ） 伝統的扶養観 肯定的高齢者観 高齢者自立観（高齢者に自立してほしい）

以上のことから、ほとんどの価値意識は変化していくということは明白で、それは、若者の持っている価値意識が、現在の生活状態と将来の望ましい生活形態と密接に関係しているからである。家族形態の変化は将来的にも変わりそうもない事実であるので、伝統的で肯定的な高齢者意識を伝承していくことはかなり困難であると思われる。それに代わり、否定的な高齢者意識が存続していくといえる。

しかし、協調的な高齢社会を構築するために、高齢者に対する差別意識を軽減する必要があるのはいうまでもない。そこで、高齢者意識に影響を及ぼす、祖父母（高齢世代）との接触のチャンスを増やすことは、肯定的な価値意識の持続のためには不可欠の方法であろう。

引用・参考文献（日本語→中国語→英語）

- 奥山正司, (1999), 「タテマエとしての敬老思想とホンネとしての老人蔑視の混在」, 『月刊 ばんぼう』7月号
- 奥山正司・秋葉聡・片多順, (1995), 『エイジズム』(法政大学出版局)
- OECD 編著・清家篤監訳, (2005), 『高齢社会日本の雇用政策』(明石書店)
- 作田誠一郎, (2005), 「日本の若者における高齢者像とその考察」, 『東アジアの若者の高齢者意識—日本・中国・台湾の大学生比較調査から—』(東アジア都市コミュニティ・高齢化研究会), 17-26 頁
- 島村逸子, (2004), 「大学生のお年寄りイメージとそれを生み出す背景」, 『立正社会福祉研究』, 第4巻第1号, 4-12 頁
- 染谷淑子, (2000), 『老いと家族 変貌する高齢者と家族』(ミネルヴァ書房)
- 田淵六郎, (1997), 「家族戦略論による老親・成人子女関係の研究—扶養関係を中心にして—」(日本社会学会報告レジュメ 第70回、千葉大学)
- 辻正二, (2005), 「東アジアの若者の老人観と老人意識」, 『東アジアの若者の高齢者意識—日本・中国・台湾の大学生比較調査から—』(東アジア都市コミュニティ・高齢化研究会), 53-68 頁
- 鳥羽美香, (2005), 「エイジズムと社会福祉実践—専門職の高齢者観と実践への影響—」, 『文京学院大学研究紀要』, 第7巻第1号, 90-93 頁
- 直井道子, (1993), 『高齢者と家族—新しいつながりを求めて』(サイエンス社)
- 中村律子, (2006), 「高齢者福祉制度の離陸期—1950年から1970年における老人の制度化過程の議論を中心に—」, 『現代福祉研究』, 第6号, 103-130 頁
- 野原泰嘉, (2001), 「儒教における老いの思想—孝との関係において—」, 『群馬松嶺福祉短期大学紀要福祉と人間科学』, 第2号, 43-45 頁
- 范蓓怡, (2008), 「台日高齢者の就労と就労意識に関する研究」(山口大学東アジア研究科 博士論文)
- 范蓓怡, (2011), 「台日における大学生の家族意識の変容に伴う老親扶養の変化—実証的な調査結果の分析を通じて—」, 『淡江日本論叢』(淡江大学日本語学科), 第24輯, 169-194 頁
- 保坂久美子・袖井孝子, (1986), 「大学生の老人観」, 『老年社会科学』, 第8巻
- G.C.ホームマンズ・橋本茂訳, (1978), 『社会行動—その基本形態—』(誠信書房)
- 正岡寛司ほか編, (1993), 『現代家族変動論』(ミネルヴァ書房)
- 森岡清美・望月嵩, (1997), 『新しい家族社会学』(培風館)
- 頼明俊・荘秀美, (2005), 「台湾の大学生の老人観といきがいの」, 『東アジアの若者の高齢者意識—日本・中国・台湾の大学生比較調査から—』(東アジア都市コミュニティ・高齢化研究会), 39-52 頁
- 陳舜文, (1999), 「仁與禮台灣民衆的家庭價值觀與工作態度」, 『應用心理研究』, 第四期, 205-227 頁
- 陳麗敏, (2006/6/15), 「從台灣老年人的生活狀況談老年照護」, 『網路社會學通訊期刊』, 第56期(出典: <http://www.nhu.edu.tw/~society/e-j/56/56-47.htm> 2012/1/1)
- 黄光国, (1995), 「儒家価値観的現代転化: 理論分析與實徵研究」, 『本土心理学研究』, 第3期, 276-338 頁
- 葉明華・楊國樞, (1997), 「中國人的家族主義: 概念分析與實徵衡鑑」, 『中央研究院民族學研究所集刊』, 第83期 春季, 169-225 頁
- Freeman, M., (1979), "The family in China, past and present." In M. Freeman(Ed.), *The study of China society: Essays by Maurice Freeman*, Stanford University press
- Triandis H.C., (1995), *Individualism and Collectivism*, Westview Press

所属: 台湾・真理大学応用日本語学科

E-mail アドレス: fanpeiyi62@yahoo.co.jp